

生死の選択 当事者の葛藤

「このまま
たのみな
感動した」
2008

警任披露公
松竹座で開
四員を引ッ
した。「松
する俳優が
自分はまだ

では、近鉄
シスなを
の名場面

「走れメロ
春のおどろ
シカル仕立
り」(09)

も挑む予定
トップを引き
という当時の

京都・南座で
、等価シツキ
舞台「わが歌
演中。物勢の
舞台が登壇す

桜花にとっ
要になる。悲
じられては
の気持ちを返
が残したの良
体にのせ、傍

新たな道楽
ネルギーを放
東雲あきら、

誠、編纂の
00



日本で「安楽死法」が成立し、国家戦略特区に安楽死の希望者を受け入れる施設が設けられる。患者、家族、医師たちの物語は、軽々しく涙を誘うことなく、観客を厳かな死と向き合わせる。そして、死を自ら選択することの意味を、考えさせる。

原作は、医師で作家の長尾和宏の小説。ラッパーの章太郎(毎熊克哉||写真左)は若年性パーキンソン病を患い、余命半年と宣告される。恋人のジャーナリスト、歩(大西礼芳||同右)とともに安楽死に反対している2人は、施設に入居して内部の実態を告発しようとする。

自ら命を絶つことを決める安楽死など認められないと、頭では考えやすい。安楽死が合法化されている欧州諸国と比べ、日本でなら、なおさらだろう。

ところが、生々しい現実を前に歩の心が揺らいでいく。末期がんの池田(平田満)と付き添う妻(筒井真理子)。認知症を患い、記憶を失うことを恐れる元漫才師の真矢(余貴美子)。歩は彼らと触れあい、生

ルトマ
ーツネ
オザシ
all
that
cinema

安楽死特区 (北の丸プロダクション、渋谷プロダクション)

と死のリアルな相克を目にする。安楽死の適否を冷静に判断すべき医師たち(奥田瑛二、加藤雅也、板谷由夏ら)が複雑な思いを抱えていることもわかってくる。そして、章太郎自身は日々衰え、生きる気力を失い、安楽死受け入れに傾いていく。

記者も昨年、実母をみとった。寝たきりになる前は死について真剣に考えることはなかったし、体が弱ってきてても、生かすことばかり考えていた。延命治療は安楽死とは異なるが、胃ろうや人工呼吸をすることでうかの判断を求められた時も、決断するまでに時間を要した。

楽になりたい、楽にさせたいという思いと、なるべく生きたい、生かしたいという思い。それぞれがせめぎ合い、容易に結論を出しにくいことは、当事者にならないと理解しにくいかもしれない。

歩もそうだ。当事者となり、入居者や医師と接して、安楽死の問題がシステムだけでなく、実存的な心の問題であることも理解する。

観客も当事者になったかのようにスクリーンを見つめることになるだろう。安楽死の遂行場面を見るのはつらいが、一方で、人を愛することの究極の形を見るかのようで、胸を打たれた。

高橋伴明監督はいつものように熟練の手腕を発揮し、ジャーナリストイックな題材を娯楽性もある人間ドラマに仕上げている。原作を大胆に脚色したペテラン、丸山昇一の脚本の力も大きい。毎熊、大西の演技が感銘深く、他の俳優陣の好サポートも光る。2時間9分。

なんばパークスシネマなどで公開中。

(近藤孝)